

本を選ぶ

NO.424 2020年(令和2年)9月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>紙型
- いしづみ
- 輝きを放つ言葉に出合うとき
- “スゴイ!かっこいい!そんなシンプルなことでいいと思う”
- 彩り・・・耳が不自由ということ・・・
- 図書館を離れて (第49回)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

紙型

外出がままならぬ初夏の頃、読みさしのままになっている本がいくつか目に付いた。例えば、ホイジンガの『中世の秋』、あるいは『ホモ・ルーデンス』。半世紀は経っている気配。今ではめっきり少なくなった全集や選集の類が全盛の頃だったか。

ばらばらめくってみると、そうした古い本は本文の組み方とか字面に特徴がある。数えてみると47字27行取り。活字と活字がぎっしり詰まって文字も小さく、今となっては活版刷り特有の読みにくさがある。活版印刷からオフセット印刷の写植(写真植字)組み版印刷に変わり、さらには電子組み版へと移り変わっていく少し前の頃の話だ。活版印刷は凸版印刷とも呼ばれ、対して写真印刷などは平版印刷と呼んでいる。大雑把に言えば、インクを付けて紙に印刷する最終の版が活字なのか、樹脂板なのかという印刷方式の違いである。

読書家の人たちからは、やっぱり活版の押しが利いた印刷がいい、などという声が当時盛んに聞かれたものだ。

だが彼らが言っているのは同じ活版印刷でも原版刷り、すなわち組み上げた活字1本1本そのものを刷版として印刷するやり方で、確かにきりりとした力強さはある。ただ少数数の印刷に限られ

る。活字がすり減るので大部数の印刷には向かない。従って大半は活字を組み上げた原版から紙型を取り、鉛版を起こして刷版として印刷されたものだった。紙型を取っておけば、数回は鉛版を起こし直すことができるので、重版や再版がしやすくなるという。この紙型の技術はフランス人が開発した技術と聞くが、要するに石膏で型を取るかのように特殊な紙を使って活字原版で押し型をとり、活字でへこんだところに溶かした鉛の合金を流し込み冷やし固めると鉛版ができるという具合だ。当時、印刷製本業のさかんな地域には活字の大元である母型を扱う店を始め、紙型や鉛版を専門とする町工場が数多くあった。

鉛版刷りの印刷が原版刷りの刷り上がりには敵わないのは当然で、紙型を起こす段階で文字が痩せたり、さらに刷りを重ねていくうちに鉛版の活字もいびつにすり減ってくると、印刷にむらが出やすくなり、刷り上がった字面にはどうしても読みづらさがつきまとった。

それにしてもホイジンガは難解だった。すべての人間の行為は遊びに最終的に結びつく、という論点が延々と繰り返られるのだが、読みにくいのを言い訳にして中断してしまった、らしい。

ところで、かつての全集や選集には月報という数頁の別刷りがつきものだった。配本と同時に届く月報は各巻末の「解説」とは違う角度から書かれたいわばサイドストーリーが多い。その道の専門家たちが書く内容もなかなか充実していた。これはこれで届く度に楽しみのひとつだった。(埜村 太郎)

祖母は、その石を大事にしていた。いつの頃からか、祖母の部屋の仏壇の脇にその石は置かれていて、祖母がその石を触っているのを見たこともあった。青みがかった灰色で、手のひらにのせてじっくりするような大きさの、楕円の、表面のなめらかな石だったように思う。

ある時、祖母からその石について話を聞いた。「みんな旅行に行ったときにね、おじいちゃんが拾って渡してくれた石なの」。もっと詳しいことを訊いたのか覚えていないが、子ども心に「素敵！」と思った。だって、おじいちゃんに渡された石を、おばあちゃんがずっと大切にしているんだから。

祖母が亡くなった時、棺にその石を入れた。そして今、祖父母が暮らした街を見渡せる山すそのお墓に、祖父と祖母とその石が眠っている。

後に、映画『おくりびと』（2008年公開）で、主人公の納棺師（本木雅弘）が川原で妻（広末涼子）に小石を拾って手渡し、失踪した父から教わった石文（いしづみ）について話す場面を観て驚いた。「石を選んで渡し、相手に想いを伝える」石文とは、まさに祖母が大事にしていたあの石ではないか。

この『おくりびと』の石文のモチーフには種本があり、映画の脚本を書いた小山薫堂さんは、「向田邦子さんのエッセイ「無口な手紙」から拝借した」とあちこちに記している。いつか脚本で使いたいと、温めていたそうだ。その向田邦子「無口な手紙」（『男どき女どき』所収 新潮社 1982年）には、

「自分がおしゃべりのせい、男も手紙も無口なのが好きである。特に男の手紙は無口がいい。

昔、人がまだ文字を知らなかったころ、遠くにいる恋人へ気持を伝えるのに石を使った、と聞いたことがある」

とある。男は「自分の気持にピッタリの石を探して」石を渡し、受け取った女は「目を閉じて掌に石を包み込」んで、相手の気持や様子を感じ取ったのだ。

そして、『いしづみ』こそ、ラブレターのもとではないかと思う」と続くが、その「いしづみ」の話

の典拠はどこかにあるだろうか。「石文」と言えば、石に文字を刻んで事績を後世に残す、いわゆる「碑」であるが、石に想いを託して送り合う二人を描いたものがあれば読んでみたい。

さておき、「無口」と書くけれど、無口な人は話をしないわけではない。石も何かを語ってくれる存在だ。昔話では、石は、主人公が道に迷っていると正しい道を教えてくれたり、赤ん坊の代わりに泣いて人を呼んでくれたり。伝説の偉人が殺されて石になったという伝承や、石を切ろうとすると血を流したり泣いたりするという言い伝えも世界中にある。

『すべてのひとに石がひつよう』（バード・ベイラー 著／ピーター・パーナル 画／北山耕平 訳／河出書房新社 1994年）という絵本には、すべての人に「自分で見つけていつまでも永遠に大切にできるような石」が、「友だちの石」が必要であると書かれている。そして、そうした石を見つけるための10のルールが具体的に書かれていて興味深い。拾うための場所、石の大きさ、色、かたち、におい…。そうして出合った「わたしの石」とどう付き合うか。表紙のジャケットの絵は、大きな石の中に幾つもの石が詰まっている構成で、石と女の子と自然空間が描かれている。座った女の子の掌には石があり、女の子は目を閉じてその石の声に耳を澄ましているようだ。

この本を翻訳された北山耕平さんはこうあとがきに書いている。「石はそれぞれが記憶装置ですし、生きている小さな地球です。石の話すことは、地球の話していることなのです。石とのつきあい方がわかってくれば、地球とのつきあい方もわかります」と。

祖母は、多くのものを所有せず、身ぎれいな人だった。だから余計に、飾り棚の中にも引き出しの奥にもしまわれることのなかったあの「石」が、存在感を放っていたのだろう。さまざまなものが集まり、押し合い圧し合いしているのを楽しんで見ているような私には、いつたどり着けるかわからない境地だが、静かに座って石を触るところからはじめてみたい。（ごみ ゆう）

輝きを放つ言葉に出合うとき

溝上 牧子

文章の良し悪しは何で決まるのだろうか。人には好みがあり、好きな文体、表現などもみんな違う。だから読まれる本も人それぞれということだろう。ある人に良いものが誰にでも良いわけではない。さて長さはどうだろうか。その文章を読んだとき、物足りないと感じるものもあれば、短いけれど、心に残るといった経験もあり、必ずしも長さではないのだろう。小説などは、全体の印象がその小説を作っているのだから、必然的にそれなりに長い文章を読むことになる。だが、その中で印象に残るのは、ふとした登場人物の一言だったり、光景だったり、仕草だったりすることもあれば、全体の余韻だったり、決まった定義などない。

私は普段、新聞を読む時に何気なくぺらぺらとめくり、ただめくって眺めるだけのこともあれば、時間や心に余裕がある時には、自分の心の赴くまま、気になる記事を読む。するとそういう時に、心に残るような記事にぶつかることがある。そんな記事は切り取ってクリアファイルにためておく。そして多くなって収集がつかなくなると、眺めなおしては印象の薄れたものを処分する。最終地点など決めていないが、今自分が興味があること、気になっていることが明確になるし、見直すことにより、その興味が継続しているかどうか分かる。というのも、眺めなおしたあげく、その記事を切り取った意味さえも忘れていくことがあるのだ。そうやって集めた記事の中で、特に印象に残っているのが、時々読み返す、この記事だ。

2020. 2. 28 の朝日新聞の(朝刊か夕刊か不明)『内戦を生きる娘よ 爆音聞いたら笑おう』と題されたイスタンブールの在住の記者(?)の署名記事だ。内戦下のシリアからSNSを通じて広がった動画が世界中で反響を呼び、その発信者取材した記事だと書いている。

以下は記事から抜粋したもの。

「飛行機がくるよ? それとも爆弾かな?」

「爆弾! 来たら笑うよ」

爆音が鳴り響くと、大笑いする親子。

(中略)

ムハンマドさんはサルワちゃんに「大きな音がしたら、それは花火の音だから、怖がらずに笑わないといけないよ」と言って聞かせた。「実際には爆撃であっても、子どもがそれを花火の音だと思えたら、喜び、笑顔になる」と語った。(抜粋)

世界のどこかで今も紛争の中にある国があり、数々の記事があちこちに存在する。つらい状況にいたとて、子どもに辛い思いをさせたくない、笑っていてほしい。どんな中にあっても笑顔を忘れないでいてほしいという父親の気持ちが伝わってくる。記事には画質がよくはないが父と娘のなんとも柔らかい笑顔の写真が添えられている。短い文章から、紛争の現場にいる彼らの日常が想像できた。命の危機に怯え、爆音に怯える日々。なんのために? なんだらう心に迫ってくるこの感じは…。父親のムハンマドさんは最後にこんなふうと言っている。

「あの狭い地域に住んでいるのも人間なんです。

人間らしく生きる権利があるはず」(抜粋)

本当にその通りだ。私が同じ立場や境遇にいたらどう生きる、生きたいと思うだろうか? 私は彼のように、ユーモアと愛情を忘れずに発想の転換をすることで人を元気にしてあげられるだろうか?

時々いろんなところに書かれた文章を読みながら、きらりとした輝きを放つ文に出合う。そこにはちゃんと、その人自身が存在している。文章の上手い下手ではない存在感が、そこにはあるのではないだろうか。(みぞかみ まきこ:朔北社)

“スゴイ！ かつこいい！ そんなシンプルなことでいいと思う”

— パラスポーツと未来を突き動かすグラフィックマガジン「GO Journal」 —

松尾 桃子

写真家、映画監督の蜷川実花さんに「パラアスリートの写真を撮っていただけませんか」とお願いしたのは2016年だ。当時、日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）は設立から1年目、どうしたらパラスポーツやパラアスリートのファンを増やせるか試行錯誤していた。スポーツに興味を持つまでには様々なきっかけがあるが、強く美しいアスリートがいることを知れば応援したくなる人は多いのではないかという発想から、著名なフォトグラファーの力も借りて実現しようと動いたのが始まりだ。スポーツを通じて、多様性を自分事として考え、ダイバーシティ&インクルージョン（D & I）社会を実現したいというパラサポのビジョンに基づいた活動である。

うれしいことにパラサポからの相談に蜷川さんは快諾してくれた。彼女の決断に賛同して、一流のクリエイティブチームも組まれることとなり、ファッション、アート、カルチャーという切り口から、スポーツファンだけでなく、新しいターゲットにもリーチできる可能性が広がった。当時は、パラアスリートの写真を積極的に掲載しようというメディアがなく「それでは、自分たちで創刊しよう！」と一冊のグラフィックマガジンが誕生する。クリエイティブ・ディレクターの蜷川さんが「スタイリッシュかつ子どもでも分かる言葉を」とタイトルは「GO Journal（ゴー・ジャーナル）」に決まり、誰でも手に取ることができるフリーマガジンとして2017年11月に創刊号が世に出ることとなった。彼女は創刊にあたって次のメッセージを寄せている。

“みんなそれぞれ違うことが、もっともっと普通になったらいい。

そんな当たり前のことがまだまだ遠い今の現状。違うからこそ、世界はこんなにも面白く美しい。

スゴイ！ かつこいい！

そんなシンプルなことでいいと思う。”

パラサポのビジョンと GO Journal クリエイティブ・ディレクター蜷川さんの考え方は重なっていた。彼女にお願いしてよかったと、この出会いに心から感謝する。GO Journal は、そのままポスターのように飾ることもできる大判で魅力的な写真をふんだんに掲載し、パラアスリートの生の声を伝えるインタビューも充実している。アスリートの力はもちろんだが、クリエイティブチーム、競技団体、協賛企業など多くの人の力添えがあって発行できる一冊だ。2020年1月までに年1回、計4号を刊行し、東京2020パラリンピック競技の中から10競技12選手をフィーチャーしてきた。大胆なビジュアルとアスリートの率直な言葉に好意的な意見は多い。目指すゴールに向けて一石を投じたという手ごたえはある。



©mika ninagawa / GO Journal ISSUE 04



車いすバスケットボール 鳥海連志選手の1枚

本誌は、全国の書店等で配布するだけでなく、公共図書館および大学図書館1,000館、高等学校5,000校へお届けしている。いくつかの図書館からは、大判で保管には難しいという声も寄せられたが、ぜひ手に取っていただきたい。蜷川氏は先のメッセージをこう締めくくる。

“この本が、意識が変わるキッカケになれば本当うれしい。

だって彼らは本当にかっこいいから。”

アスリートと蜷川さんの化学反応で「強く、美しい」は色濃くなった。まずは司書のみなさんに何か感じていただければ、こんなにうれしいことはない。GO Journal 公式サイト (<https://www.parasapo.tokyo/gojournal/>) も合わせてご覧ください。(まつお ももこ：日本財団パラリンピックサポートセンター)

彩り・・・耳が不自由ということ・・・

神部 京

私たちは自分の身体を通して、身の回りの世界を感じ考え生活を送っている。世界をどう捉えるかは人それぞれ異なることとはわかっている、世界がどのように映っているかは分からない。今回は身体的機能、特に耳が不自由な場合について作品に触れ想像を広げてみようと思う。

はじめに、生まれつき聴力がない娘、麗の3才～5才までの記録を父親がスケッチした作品、『宿題の絵日記帳』（今井信吾著／リトルモア／2017）。生まれて間もない麗は3ヶ月検診で高度の難聴と診断された。病院の先生のカウンセリングでなるべく早く言葉の教育を始めた方がいいとアドバイスをもらう。その後麗は日本聾話学校（手話を使わず言葉話す教育を行う）へ入学。補聴器を装着し音を感じ取る勉強を始めた。ここでは相手の言葉を聞いて理解し、自分の考えていることを声に出して話すという聴覚主導による音声言語でのコミュニケーションを基本としていた。小学校は公立へ入学。麗はこの頃、自分は本当の音を知らないということを意識し始めた。きっかけはマイクを通して聞こえてくる声に、自分も補聴器という機械を通して聞こえてくる音の世界にいること、そしてそれは本物の音ではないということに気がついたのだ。また、聾話学校という難聴者の生徒しかいないある意味では大切に保護されていた生活から、健聴者しかいない世界に移行していったということにも。

次に耳の聞こえない両親のもとに生まれた少女アンの話、『手で笑おう』（アン・マリー・リンストローム著／枇谷玲子訳／汐文社／2012）。アンは両親とアンと同じく健聴者の弟と聾者向けの集合住宅で育った。ここに住む大人は読み書きが苦手な人が多く、アンは新聞や手紙、領収書を読むお手伝いをしていた。聾の人たちは話し言葉を聞くことのないまま書き言葉を覚える。そのため、文章の繋げ方や助詞の活用、語順、状況に応じた言

葉の使い分けに苦勞することが多い。スウェーデンの聾教育は1809年にすでに始まっていたが、教育制度や教授法は当時それほど整っていなかったため、聾学校に行ってもしっかりと教養が身につけられず、賃金の高い仕事に就けず貧困に悩まされる人も多かった。

アンは聾者と健聴者をつなぐ架け橋になろうと夢を見る。スウェーデンろう連盟で働き始めたころ、手話通訳士の教科書や手話辞典を手探りで作った。手話通訳士の養成講座の開講準備にも携わり、自身も通訳士として活躍していく。

最後に、生まれてから病気に罹り聴力を失った9歳の女の子ミーガンの話、『耳の聞こえない子がわたります』（マリー・マトリン作／日当陽子訳／矢島眞澄絵／フレーベル館／2007）。

夏休み、ミーガンの近所に同い年の女の子シンディが引っ越してきた。シンディはミーガンと話せるように、母親に手話を教わる。2人で参加したキャンプでは、同じ班になった聾学校に通うパーブという子とミーガンは手話でのやり取りを楽しむが、2人の会話に入っていけないシンディは寂しさを感じる場面もある。また、ミーガンがキャンプ場で1人迷子になってしまう場面では、音が聞こえないという特性が顕著に感じられる。

ミーガンはシンディにとって「私にできないことがたくさんできる」と言わせる存在であり、また両親も耳が聞こえないからといって決して甘やかしたりはしない。そして、「ほら、あなたにはこんなことができるでしょ？」と気づかせてくれる。

それぞれの作品を通して、音のない世界を言葉で人に伝えることはとても難しいということが伝わってきた。また、取り巻く環境としては、発音が下手でも躊躇せずにどンドン話したいことを話せる環境があること、共通の音の世界がなくてもお互いに気持ちを傾かせることができれば繋がる緒となるのではないだろうかと感じた。（かんべ みやこ）

図書館を離れて (第49回)

—「いく」と「ゆく」④—

並木せつ子

明治から昭和初期（1920年代）生まれの人たちを見てきたが、「行く」や「ゆく」を使うことが多く「いく」を使う例は少なかった。この後、1930年以降を見ていくが、同じ昭和前期をあえて1920年代と分けたのは、この辺りを境に変化の兆しが見えたからである。

昭和生まれ（1930～45年）

平岩弓枝（1932年）は《出かけて行く》《屋敷をあけるわけには行かない》のように意味に関わらずすべて漢字。

黒柳徹子（1933年生）は《ハワイに行く》《うまくいくはずがない》のように、「行く」と「いく」の使い分け。

斎藤たま（1936年生）は「……ていく」という言葉そのものが少ないが、《宿を願いに行く》《生きていくには》など、一応「行く」「いく」派。《つれてゆかれるのがおそろしい》という例もあった。

田村セツコ（1938年生）も《食べに行きましょう》《うまくいかないとき》で「行く」「いく」派。

佐野洋子（1938年生）は《外国へ行く》《行きつもどりつ》《変動してゆく》と、概ね「行く」と「ゆく」だが、必ずしも意味で使い分けられてはいない。《生きてゆかねばならない》《生きていけない》のような使用例もあった。

森村桂（1940年生）は《歩いて行く》《力をいれないわけにはいかない》のように「行く」と「いく」が混在。《買いにいく》にひらがなが使われるなど、厳密に使い分けられてはいない。

末盛千枝子（1941年生）は《家に行く》《そうはいかない》《訪ねていく》と、概ね「行く」と「いく」の使い分け。

ここまでが戦前生まれである。1930年以降「いく」という言葉を使う人が増えてきている。この時期、何か言葉遣いに影響を与えるようなことがあったのだろうか。興味深く思い近代以降の国語教科書と児童文学の流れを調べてみた。

国定教科書が始まったのは1904（明治37）年。

1945（昭和20）年まで続いたが、何度か内容が変更され5期に区分される。第1期の使用年は1904年から1909年まで、2期は1917年まで、3期は1932年まで、4期は1940年まで、5期は国民学校となり1945年までである。教科書を使用した人の出生年はこの使用年より7年ほど早くなるわけだが、誰がどの時期の教科書を使用したのか当てはめてみよう。

第1期教科書を使用したのは壺井栄・宮本百合子。2期は幸田文・石井桃子・沢村貞子。3期は堀文子・岡部伊都子・志村ふくみ・高峰秀子・武田百合子。4期は茨木のり子・石牟礼道子・田辺聖子・柄折久美子・向田邦子・須賀敦子・平岩弓枝・黒柳徹子。5期は斎藤たま・田村セツコ・佐野洋子である。森村桂と末盛千枝子は戦後の教科書になる。野上弥生子は国定以前の教科書であった。

明治生まれは2期以前、大正生まれは3期、昭和初期は4期、それ以降は5期の教科書を使用していて、「ゆく」と「いく」の言葉の変化が、教科書の使用時期とほぼ一致する。「いく」が目立ってきたのは4期と5期の境目、平岩・黒柳のあたりである。

ならば教科書の影響かと考えたくなるが、『日本国語大辞典』に《明治以降では国定読本が「いく」の方を基準とした》と記載されたとおり、小学1年の教科書はすべて仮名の「いく（イク）」なのである。従って、教科書の影響とは言い難い。（国定以前の教科書は「ゆく（ユク）」、1期には「ゆく」もあった）。

児童文学や絵本はどうだろう。復刻版や国立国会図書館デジタルコレクションで確認してみた。昭和初期頃までの出版物は児童向けであっても、絵本でない限り容赦なく漢字が使われている。その代わりに、すべての漢字にルビがふってあるので、「行く」をどのように読んでいたかがわかってありがたい。

明治時代、アンデルセンやグリム、『ロビンソンクルーソー絶島漂流記』などの翻訳もの、巖谷小波の『こがね丸』やお伽話などが出版された。それらの多くは「行」に「ゆ」というルビだが、上田万年訳の『おほかみ』（「オオカミと7匹のコヤギ」）と

『安得仙家庭物語』（アンデルセンの物語集）は「行」に「い」、若松しづ子訳の『小公子』は「行」に「ゆ」または「い」で、私が見た中でルビが違っていたのはこの3点だけだった。

大正時代は『立川文庫』が人気を博した。さらに『少年倶楽部』『赤い鳥』『コドモノクニ』など創刊されて、日本の文学者による創作童話も増えた。文章はまだ「行く」に「ゆく」というルビのふられたものが多いが、後半になると「いく」や、「ゆく」と「いく」の混在も少し増えてくる。『赤い鳥』（1918年～）掲載の童話を見ると、初期には「ゆく」が多かったのに、1921年頃から後は「いく」だけになった。

昭和に入ると1927年に興文社『小学生全集』（全88巻）、アルス『日本児童文庫』（全76巻）、『キンダーブック』の創刊があった。この二つの全集も「行」にルビという形は変わらない。ルビは『小学生全集』が「いく」、『日本児童文庫』は「ゆく」の巻と「いく」の巻両方あった。『キンダーブック』はカタカナ書きの絵本で、1928～30年頃には「イク」、1934～40年頃は「ユク」、1941～42年頃には再び「イク」になった。

他に『ああ玉杯に花うけて』（1927年）は「ゆく」、『敵中横断三百里』（1931年）は「ゆく」と「いく」が混在、『吼える密林』（1933年）は「ゆく」、『乃木大将（講談社の絵本）』（1936年）はカタカナ書

きで「イク」、『ザンボーと象（コドモノクニ）』（1937年）はカタカナ書きで「イク」と「ユク」が混在、『ウミへ』（吉田一穂文・佐藤忠良絵 1944年）はカタカナ書きで「イク」だった。

総じて昭和時代は（特に1930年あたりから）、「ゆく」に「いく」や「混在」がかなり入り混じって使われるようになったが、こうした状況に異議を唱える人もいた。沖野岩三郎は『大人の読んだ小学国語読本』（1940年）の中で《吾吾のやうな童話文学に携ってゐるものは、いつも此の『いく』で苦勞をしてゐるのである。ここは『ゆく』と、よんでほしいと思つて、ことさらふりがなをして置いても、雑誌社や新聞社の方で、勝手に『いく』に変へてしまはれる。……文部省で『いく』と、きめてあるからと……吾吾の言ふことには、耳を傾けてくれない》と不満を述べ、《どこかで、はっきり、『いく』とも、『ゆく』とも二つのよみかたのある事を教へておいてほしい》と主張している。こういう考えの大人は他にもいたであらう。子どもがいろいろな読み方・書き方をするようになって不思議はない状況だった。

児童文学の中の「ゆく」と「いく」の言葉の変化は、先に取り上げた著者たちの流れともほぼ合致している。「同時代の出版物に影響を受けた」というのは当たり前の答えかもしれないが、その流れを自分の眼でたどることはできたような気がする。

（なみき せつこ）